

ラカンの対象関係論…認識論的枠組みの発生の論理として

荒谷大輔

はじめに

ラカンにおいて対象の概念は、どのように位置づけられるのだろうか。後期ラカンにおいてとりわけ重要な役割を担う「対象 a」は、言語的な認識の外側に見出されるものとして理解される。哲学における対象概念が、實在論的に捉えられる場合においても、観念論的に理解される場合でも、認識する主体（主観）との関係において語られるものだとすれば、ラカンが「対象 a」という概念に与えた特質は、奇異なものといわざるをえないように思われる。例えば、カントの認識論の枠組みで考えるならば、「概念なき直観は盲目」といわれるように、概念を媒介にして認識されない感性的なものが、実際、「対象」といいうる特徴を持ちうるかが問われることになるだろう。同じことは、ラカンが独自の思索の出発点とした構造主義的言語学によってもいえる。人間の認識が言語構造に依存し、言語を介して何らかのものの認識が成立するのであれば、言語的な認識の外側に見出されるものが、どのような意味で「対象」となりうるのかを示す必要がある。仮にラカンがいうような認識の枠組みの外がありうるとしても、それが殊更「対象」と呼ばれる意味は、なお問われうるのである。

本論の目的は、精神分析、とりわけラカンにおける「対象」の概念がもつ意味を明らかにすることにある。一般的な哲学の概念用法を外

れたところに見出される「対象」の概念は、実のところ、認識が認識として成立する構造を解明する鍵となっている。ラカンの対象論が、認識論的な枠組み自体の成立を問うものであることが明らかになるはずである。

1. 精神分析における「対象」

フロイトは、「欲動とその運命」と題された論文において、欲動の目標と対象を区別するべきとした。

欲動の対象とは、それにおいて、あるいはそれによって欲動が自らの目標 (Ziel) を達成しようとするものである。これは欲動に関わるもののうち最も可変的なものであり、元からその欲動と結びついているわけではなく、欲動の満足を可能にするという適性を持つゆえにこの欲動にひと括りにされているにすぎない。これは必ずしも何か余所から来た客体であるとは限らず、自分の身体の一部であってもよい。欲動が様々な生涯の運命を辿る中で、対象は何度となくしばしば変更されうる。欲動のこの遷移は、一連のとりわけ重要な役割を担っている。同一の対象が同時にいくつかの欲動を充足する役目を

二〇一四年一月三十日受付

* 江戸川大学人間心理学科准教授 哲学、倫理学

果たすというような場合もありうるが、これはアルフレート・アドラーのいう欲動の絡み合いの事例である。[Freud:GW-X, 215]

欲動は、自らの目標を達成するために、様々なものを「対象」として、主体を動機づける。欲動は、「対立物への反転」、「自分の身体への向き直り」、「抑圧」、「昇華」などの道筋を通る [cf. Freud:GW-X, 219ff.] が、欲動の対象は、その過程において入れ替わり、欲動の充足という同じひとつの目標に対して、その都度変化していくとされる。「対象」とは、つまりフロイトにおいて、欲動が自らの充足のために関係する可変的な項を示しているのである。

「対象関係学派」と呼ばれる人々の理論的な展開によって、フロイトの対象概念は、より明確な位置づけがなされるようになる。メラニー・クラインは、言語習得以前の幼児の外界との関わりにおいて、主体と対象との関係を重視した。フロイトは、言い間違いや検閲など、無意識における言語の機能に焦点を当てた分析を行ったが、メラニー・クラインは、言語的な蓄積を前提にできない幼児を分析するにあたって、子供における「遊び」の観察を行った。「子供は、遊びの中で、話す代わりに演じている。子供は行動を——それはもともと思考の代わりをしていたものである——言葉の場所におくのである。つまり、行動化（アクティング・アウト）は、子供にとって非常に重要なものなのだ」[Melanie Klein, 9]。メラニー・クラインにおいては、「遊び」における幼児と「対象」との関係を分析することが、幼児の欲動の構造を明らかにする重要な手段とされたのである。

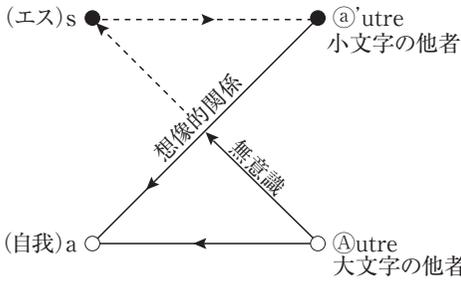
幼児にとつての「対象」は、言語的なものを基礎としないことにおいて、何らかの一般的な表象の体系に準拠して切り分けられるものではない。「対象」は、幼児の欲動とその都度の関係において析出すると見なされたのである。メラニー・クラインが、その理論展開において、カール・アブラハムが導入した「部分対象」という概念を軸と

したのは、そうした幼児の欲動における対象関係の特殊な様態を記述するためであった。「成人」が前提とする認識の体系がどのようなものであれ、幼児はそれを前提とすることなく、外界との関わりを独自に表象する。「乳房」は、通常の言語的認識においては、有機体の身体的な統合の中に位置づけられる、ひとつの部分でしかない。幼児にとつてそれは、何らの概念的な一般性の媒介も経ないまま、直接的な対象として現れる。メラニー・クラインは、こうして、必ずしも言語的な一般性によって媒介されない主体と「対象」との関係を記述しようとしたのである。

だが、言語的な一般性を媒介としない「対象」との関係は、幼児の主観にのみ依存するものだろうか。クラインの影響下に独自の理論を展開したドナルド・W・ウィニコットは、「対象」を主観と客観の中間にあるものと捉え、対象関係によって捉えられた「対象」から客観的に認識される対象が成立する過程を記述しようとした。「対象」が、幼児の「主観」に還元され、それ以上のものではありえないとすれば、発達に伴って「対象」が「客観的に認識された対象 (object objectively perceived)」へと段階的に移行することを説明することが困難になる。幼児にとつて「部分対象」として現れるものが、徐々に「全体対象」として現れてくることを説明するためには、主観と客観の中間領域にある「移行対象 (transitive object)」を考える必要があるとウィニコットはいうのである。

「対象関係」を主題としたセミナーの中で、はじめて対象概念を主題化した際、ラカンが参照したのは、ウィニコットの「移行対象」であった。

子供の遊びの対象はすべて移行対象 (objets transitionnels) です。子供には、いわゆる玩具を与える必要はありません。子供は手に入るものすべてを玩具にしてしまいます。これが移行対象です。これ



「対象」との関係から、言語を媒介とした一般的な認識の枠組みが獲得される論理的な構造を、ひとつの図の中に記述したものであったといえる。

無意識の欲望の主体（S・フロイトが第二局所論で無意識の位置に引き直した「エス」と「自己意識」を持たない無意識の主体（Subject）の両方を同時に示している）は、自らの欲望の「対象（a）」を介して、想像的な世界における「自己（a）」の位置を確立する。だが、その「想像的關係」は、「対象」との関係に依存した不安定なものであるため、幼児はヤがて、「エディプス・コンプレックス」と呼ばれる過程を経て、その想像的關係

らの対象について、それがより主体の側にあるのか、より対象の側になるのか、その点を問うことはできません。これらの対象はまったく別の性質のものであります。ウイニコットはこれらの対象を移行対象と名づけるにとどまりましたが、我々はこれらを端的に想像的な対象と呼びます。[SIV.35]

ラカンはこうして、ウイニコットの「移行対象」を「想像的对象」と捉え直し、自らの理論の中に位置づける。主体と対象との関係は、ラカンにおいて、「L 図」と呼ばれる理論装置の「*par*」の間の「想像的關係」として捉えられるのである^①。対象関係を扱うセミナーの前々年、「L 図」を定式化するとき（cf. [SIII.28ff]）ラカンは、「鏡像段階」と呼ばれる幼児と他者との想像的な関係を、「象徴的なもの」の機能との関係で捉え直した。本論のこれまでの文脈に接合するかたちでごく簡単にいえば、それは、言語習得以前における幼児の欲動と

を支える「大他者（A）」を召喚し、言語を介した象徴的構造の中に安定的な「自己」の意識を確立する。ラカンのL図は、すなわち、言語習得以前の幼児の「対象」との関係から言語的な構造に依拠した認識が成立するまでの構造を示すことにおいて、クライン・ウイニコットにおいて問題となっていた事柄をはっきりと図式化してみせたものになっているのである。

前言語的關係から言語的構造へ至る過程を語ることは、それ自身、哲学的な分脈における認識論として議論されるものである。言語的な構造を媒介にした対象の安定的な認識がいかにして成立するかという問題は、精神分析における「対象」の理論のみならず、様々な哲学者がその認識論において議論してきた事柄であったのである。主体と対象との「想像的關係」から「象徴的なもの」への移行を語るラカンが、その点について意識的であったことは、初期のセミナーの端々に示されている。

そこ「対立物の反転などを捉とする子供の世界」では、想像的關係という前言語的な素材が当然のことながらディスクールという形で表現されています。そこでは我々は、ずっと以前から経験的演繹によっても、「超越論的」カテゴリーの演繹によっても、探索されてきた馴染の領野にいます。しかし、我々が想像的と呼ぶこの前意識という源、この倉庫はよく知られていないわけではありません。それは幸い哲学において既に扱われてきました。カントの観念図式は、この領野の一角に位置するものです。[SIII.85]

ラカンはここで^②、概念に包摂される手前にある「前言語的な素材」と主体との関係を、カントの図式論と関係づけている。カントの図式論は、よく知られているように、感性に与えられる直観がいかにして概念へと包摂されるかを論じるものであったが、「前言語的な素材」

から言語的な認識へと至る過程を論じるラカンの議論は、そのまま哲学的な認識論として理解されるのである。

カントの認識論は、そもそも、ヒュームによる「想像力(imagination)」の議論を材料に組み立てられているものであった。ヒュームによれば、経験に与えられる「素材」だけに依拠して理論を立てようとすれば、「自己」の存在も含めたすべては、まずは流れ去る印象の中に切れ切れになっている。そうした切れ切れの素材が「想像力」によって構成され、外界が表象されるとしたヒュームの議論を、カントは図式論として自らの理論のうちに取り入れたのである。「想像的なもの」を語るラカンが依拠していた事柄もまた、そうした、「自己」の存在をも含めたすべてが切れ切れのままに流れ去るような「意識」のあり方であったといえる。

こう考えてみてください。意識というものは、「イメージ」と呼ばれる何かを生み出すことができる表面が与えられるたびに生じるものである、と。しかも、これはまったく思いがけないところで、互いにまったく離れたところでも生じます。これが意識についての唯物論的定義です。[S.II, 65f.]

意識について「唯物論的」に定義できるとすれば、それは、切れ切れのままに生起するイメージでしかない。カントは、統覚のような「自己」の意識の存在を「超越論的」に要請したが、経験だけに依拠して事柄を考える限り、我々に与えられているのは、自らの身体の統合すら果たされていない、切れ切れなイメージでしかないというラカンはいつている。カントによる「自己意識」の定義の手前において、純粹に経験を依拠して語りうるのは、「寸断された身体」[E.cit./129 et S.II, 65f.]とラカンが呼んだような切れ切れな「自己」のイメージだといわなければならないだろう。「想像的なもの」の領域における認

識は、確かな一般性を確保する手前で、様々に揺れ動くものと見なされるのである。

カントは、統覚やカテゴリー、図式といった概念を「超越論的」な仕方でも要請することによって、経験的に与えられる素材が概念に包摂される構造を提示した。カントによれば、経験が経験として可能になるためには、それらが機能していなければならないとされたのである。だが、少なく見積もっても、経験を経験として記述可能にするためにカントが要請した構造が、唯一それ以外には考えられないものかといえば、そうではない。「自己」の意識のもとに経験が構造化され、前言語的な素材が概念的な一般性のもとで理解されるに至る過程を示すラカンの理論は、ある意味において、カントとは異なる仕方でも、通常の意味での「経験」が成立する構造を示すものと考えることができ。次節では、「対象」をめぐる展開する無意識の欲望の道行きが、言語的な枠組みに準拠した認識へと至る構造を、ラカンの「対象関係論」をもとに検討していきたい。

2. 「対象」のロンド…想像的關係から象徴的秩序へ

ラカンは、幼児における欲望の対象の変遷によって、「エディプス・コンプレックス」と呼ばれる「自己」の意識の獲得の構造を記述した。そこでは前節でみたL図の構造が成立するまでの論理的な時間の道行きが、「想像的なもの」「象徴的なもの」「現実的なもの」という三つの圏域の絡み合いの中での「対象」の変遷として記述される。そこで鍵となる「対象」は、どのような役割を担っているのか、セミネール4巻で展開されるラカンの論述に即して見ていくことにしよう。^③

(1) 「フォルト／ダー」

ラカンはまず、「違約 (Frustration)」という概念を軸にして、単に切れ切れのイメージだけが流れ行く主体に、欲動が発生する場面を記述する。「違約」という概念もまた、ウイニコットから援用されたものであるが、ラカンは、それを自らの対象関係論の「鍵」としているのである [cf. S.IV.34]。幼児は、「最初の理想的な母子関係」においては、「現実的なもの」としての乳房との関係において充足して、想像的な対象としての「乳房」を追い求める契機を持たない [cf. 'bid']。だが、その充足が果たされない状況が現出することで、その充足関係とのずれが「違約」として現出する。ラカンは「違約」という概念によって、主体が「現実的なもの」から離れて「想像的なもの」を追い求める論理的な契機を示そうとしているのである。

ラカンの思想において重要な役割を担っている「現実的なもの」という概念の錯綜した内実について、ここで立ち入って検討することはできない。ラカンは別の年のセミナーにおいて、初期フロイトの認識モデルで語られていた「もの (Das Ding)」という概念を参照しながら、その認識を「経験の外部にある知覚」[S.VII.63]、「オリジナルで原初的な生の印象」[bid]、「現実的なものの知覚」[S.VII.65]、「シニフィアンの連鎖の起源がある彼方」[S.VII.253]と述べていた。「現実的なもの」とは、その限りにおいて、「想像的なもの」の領域からも「象徴的なもの」の領域からも抜け出る「認識の外」の「もの」として理解することができるだろう。対象関係論の文脈では、「現実的なものは、我々の臨界点にある」[S.IV.31]と語られている。厳密に言えば、「現実的なもの」という概念を単純な認識論的枠組みで理解することはできない⁽⁴⁾のであるが、哲学的な文脈にラカンを接合しようとする本論において、認識論との接点を議論の出発点とすることには一定の有用

性がある。ここでの「現実的なもの」としての「乳房」は、すなわち、想像力によっても言語によっても表象されないままに、主体と関係をもつものとして理解することができるのである。

「現実的なもの」の領域における「乳房」との充足関係から離れることで、主体に「違約≡フラストレーション」が現れる。「フラストレーション」は、通常「欲求不満」と訳され、主体の感情の様態のひとつとして日常的に用いられるものであるが、ここでラカンが記述しようとしているものが、幼児の主体の中に現れる感情の類ではないことに注意する必要がある。ラカンは、英訳される前のフロイトの用法に立ち返って、この語を「違約 (Versagung)」として理解すべきだとしている [cf. S.IV.180]。それは、「失われたもの」の復旧の要求であり [cf. S.IV.36]、充足関係からの、論理的な「ずれ」を問題とする概念なのである。

実際、「現実的なもの」の領域での充足から離脱した主体にとって、そこで「何」が失われたのかは全く明らかではない。ここで失われた「何か」とは、いわば「現実的なもの」としての乳房であるが、それは、主体の認識の外にあるものであった。主体はここで「現実的なもの」における充足関係から離脱することで、そこで失われたものが「何か」を問う構造の中に参入する。その失われた何かを取り戻そうとする運動が、欲動として主体を突き動かす、切れ切れに与えられたイメージを想像力によってつなぎ合わせる認識の努力へと導くことになるのである [cf. S.IV.15f.]⁽⁵⁾。

すなわち、「違約」という概念は、ラカンにおいて、幼児の主観において感覚されるものであるよりもむしろ、主体の「対象」へ向けた欲動が発生する論理を示したものであることができる。それは「認識」へと向けた主体の欲望の発生の論理的な構造を示すものなのである。

では、このような論理的な「ずれ」によって、「失われた何か」を求めた主体の「想像力」が機能しはじめるとして、その探求は、何を

「対象」として見出すことになるのだろうか。ヒュームは、与えられた対象が一定のまとまりをもって認識される過程を「連合」によって説明した。ヒュームにおいては、様々な印象は、「類似」「近接」「対照」など、与えられる経験の側の特質によって構造化されると考えられた。しかしながら、ラカンはこの認識のごく初期の段階に、言語構造参入以前における、特殊な仕方での「象徴的なもの」の機能を見ている。クライン派の「対象」の発見を「プラトンの想起」と同様の誤謬と批判し、あくまで「経験が示すもの」に即した議論を要求しながら [cf. S.IV.65f.] ラカンは、「動因 (agent)」と呼ばれるものを要請している [cf. S.IV.66f.]。「前言語的な素材」における「想像的關係」が成立するためには、「象徴的なもの」としての「母」が「動因」として機能していなければならないとラカンはいうのである。

母は原初的な対象とは違います。母は最初からそれとして出現するわけではなく、フロイトが強調したように、こうした「フォルト／ダー」の糸巻き遊びのような「最初の遊びから登場するので……対象はこの場合は糸巻きですが、6ヶ月の幼児がベッドの縁を越えて投げ捨て、また取り戻すことのできるものなら何でもよいのです。子供によっては極めて早期に分節化される、この現前・不在という組み合わせの中にすでに、違約の動因 (agent) の最初の設立が含まれています。[S.IV.67]

不在と現前を分かつ差異として機能する「糸巻き」が、ここで「母」と呼ばれる「象徴的なもの」の領域を切り開くとラカンはいう [cf. S.IV.67f.]。ここでの「糸巻き」は、もちろん、すでに何らかの仕方で存在している言語的な構造を媒介して認識された特定の対象を示すものではない。それは、何らかのシニフィアンによって「糸巻き」として示されているのではなく、主体にとって、単に「不在・現前」

の差異を分かつものとして現れているのである。

それはしかし、まさに現前と不在の間の差異 (+/-) を示すことにおいて、最初の「象徴的なもの」として機能するとラカンはいう。その単なる差異において、「母」と呼ばれる「動因」が立ち上がるとラカンはいうのである。これはどういうことだろうか。

「盗まれた手紙」に関する初期のセミネールにおいて繰り返し語られていたように、単純な「+」の差異だけが連続して示される状態において、その差異が何を示すか、全く明らかでないままに、差異自体が自己構造化して一定の「象徴的な秩序」を形成しうるのであった [cf. Écrits 47.S.II.226f.]。「++」「+++」「+」……など、特定の差異が連続する場合においてさえ、その連続のうち可能な組み合わせとそうでないものの規則が立ち現れる。「+/-」の差異はそれ自身、「何か」を示そうとしている (significant … シニフィアン) が、その差異によって何が示されるのか (signifié … シニフィエ) は全く明らかではない。差異を差異として示すだけのシニフィアンは、しかし、それによって指し示されるシニフィエが確定していない状態にあつてなお、それ自身において一定の秩序を形成しうるのである。

だが、差異がそれ自身、自己構造化される契機をもっているとしても、その「象徴的秩序」が主体の「対象」の探求にどのように資するかは直ちに明らかではない。それらの差異は、特定の構造をもって何らかのものを指し示そうとしているが、それらによって指し示されるものは、なお不確定なままに留まっている。「シニフィアンの宝庫」[S.V.16]として立ち現れる「母」の「象徴的秩序」は、それゆえ、主体にとって、「対象」の探求のために決定的な影響力をもつ何か(動因)として立ち現れながらも、なお不完全な状態に留まるといわれることになる。この認識の最初の段階における「象徴的なもの」の秩序を司るものこそ、ラカンが「母」と呼ぶものなのである。

主体は「対象」を求めて「母」に「呼びかけ」[S.IV.68]、失われ

動因 = 動作主	欠如	対象
象徴的な母	想像的な違約	現実的な乳房

哲学的な認識論の分脈に照らせば、この状態における主体は、自己組織的に形成される特異な概念の秩序を形成しながらも、なお経験的印象とそれを繋ぎ合わせる「図式」が不確定な状態にあるということができらるだろう。差異の自己組織化によって形成される象徴的秩序は、経験から独立した独自の推論によって形成される。カントにおける理性の秩序がそうであったように、純粹に理性的な概念は、経験との接点を全く持たずに推論されるのである⁶⁾。だが、ラカンにおいて、最初の象徴的秩序を司る「母」は、「理性」のような確かな推論を行うものとは見なされていない。ここで「動因」と見なされるのは、客観的妥当性を保証するような「理性」ではなく、指し示されるもの（シニフィエ）が常に揺れ動く「母」である。ラカンは、経験を成立させるために必要とされる「動因」を、

た何かを探り当てようとする。ここでの「母」は、もちろん、特定の言語構造の中で、例えば「父」との差異によって捉えられるようなひとつのシニフィアンではない。それはあくまで、自己組織化される象徴的秩序の「動因」として主体に立ち現れるものと考えerる必要がある。主体は、その「象徴的なもの」への呼びかけの中で「想像力」を働かせ、「現実」において失われたものを探し求めるのである。

こうして、「対象」をめぐって展開される幼児の欲望の道行きの第一段階における「想像的なもの」「現実的なもの」「象徴的なもの」の三つの領域の絡み合いが示されることになる。

「現実的なもの」としての乳房との充足関係から切り離された主体は、「想像的なもの」の領域において、失われた何かを求めはじめる。そして、その探求を方向づけるものが、「シニフィアンの宝庫」としての「母」なのである。

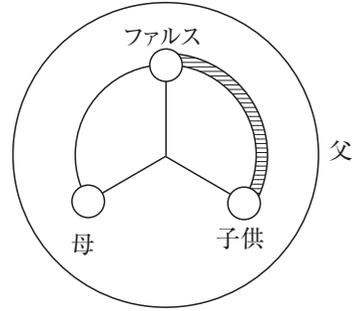
一気に「超越論的」に要請する手前で、そこへ至る論理的な過程を記述しようとしている。エディプス・コンプレックスの入り口にある主体は、差異が差異としてのみ示されるだけの揺れ動く「象徴的秩序」を鏡として、まずはそのうちに自らを位置づけようとするラカンはいうのである。

(2) 「母」の失墜

こうした揺れ動く象徴的秩序に照らした「対象」の探求は、しかし、必然的な危機へと至るとラカンはいう。「もし象徴的動因、すなわち、子供と現実的对象との関係において不可欠な項となっている母が、もはや応えないとしたらどうなるでしょう。主体の呼びかけに母が応えないならば、我々自身で答えを出しましょう。母は失墜します」[S.IV,88]。「母」への「呼びかけ」によって成立していた「対象」の探求は、その「母」が十全に応えうるものではないことが主体にとって明らかになるや、その権威を失うことになる。ここでの「母」への「呼びかけ」を、日常的な認識の枠組みをそのまま適用して、「通常」の意味での幼児による保護者への保全要求と考えることはできない。

ラカンがいうように「象徴的なもの」として大他者は、そもそも、「現実の生者でなければならぬ」ということは全くない」[S.V,116]であり、その意味で、主体の「母」への「呼びかけ」を、不在の母の現在の要求と理解することはできない。「象徴的なもの」としての「母」への「呼びかけ」は、「母」がまさに正しく「象徴的な秩序」として機能することを要求するものと考えられるのである。

「母」への「呼びかけ」の中で主体に認識される「対象」は、ラカンのいうように、「現実的なもの」の次元での満足とは別に、「象徴的なもの」の次元での「満足」をもたらすものになっていた[S.IV,69]。例えば、主体が何か（現実的乳房）を口にするとき、そこ



では、「現実的なもの」の次元で対象化されない満足が再び見出されると同時に、「象徴的なもの」の次元における秩序と現実との合致として経験される。それは「母」との対話において得られた成功の体験であり、「母」の象徴的秩序の「力」の現れということができる[cf. id.]. そこでは、失われたものを十全に取り戻すための手がかりの確かからしさが、それ自身、「現実的なもの」の次元とは全く異なる次元において、主体に「満足」を与えるものになるのである。

だが、この象徴的なものの次元での「満足」を追い求める過程において主体は、「母」があまりにも「気まぐれ」[S.IV.68]で、恣意的に過ぎることに気づかされることになる。「全能 (toute-puissance)」[S.IV.69]の「母」は「象徴的なもの」を司るが、その秩序は不安定で、安定した「満足」を主体に保証しない。さまざまな差異だけを主体に指し示すシニフィアンは、確定したシニフィエに辿り着かないまま、現実との会合を逃し続けるのである。

そうして「母」の象徴的秩序は「失墜する (déchoir)」へとになる。内在的に構築された概念的秩序はそこで一度放棄され、確かな「客観性」をもちうる「象徴的なもの」があらためて探求し直される。そこで主体が求めるのは、「母」の秩序を上位において枠づける何か、すなわち、ラカンが「父」と呼ぶものとなる。「父」は、そこで、「最初の三つの対象」[子供、母、ファルス]「失われた対象」のすべてを包摂し、象徴的な関係へと結びつける第四の項「[S.IV.84]として、ありうべき客観的な象徴的秩序の「動因＝動作主」として、主体に「想像される」。差異を差異として示すだけの「母」の秩序を「全体」と

して枠づけることによって、「父」は、それぞれの差異の全体における価値を確定しうると見なされるのである。

構造主義的言語学が示すように、差異を差異として示すだけのシニフィアンが、それによって指し示されるもの（シニフィエ）を確定するためには、「ラング」と呼ばれる言語構造の全体が指定される必要があった。「狼」というシニフィアンが指し示すものは、例えば、ひとつのラングの中で他のシニフィアンとの否定的な関係によって、それは「猫」ではなく、「山犬」でもなく、・・・とすべての可能なシニフィアンの適用が否定されることで析出する。シニフィアンによって意味されるものが確定するのは、それらのシニフィアンが帰属する象徴的な体系の全体があらかじめ指定され、シニフィアン同士の関係が整序されることによつていのである。

エディプス・コンプレックスの第二段階において主体によつて想像される「父」は、そうした、シニフィアンの秩序全体を枠づけるような何ものかであると考えられる。すぐ後に見るように、ラカンは、対象関係を論じる前年のセミナーにおいて、それ自身においては何も意味しないシニフィアンに、対応する意味が釘付けられる構造を、ソシユールの構造主義的言語学を参照しながら論じていた。ラカンはソシユールが言語の共時的構造しか論じないことを批判しながら [cf. S.III.135] 「全体」へと閉じられる過程自体を記述しうる通時的な「言語学」を示したのである [cf. S.III.207]。シニフィアンとシニフィエの一对一対応するに至る論理的な過程を記述することによつてラカンは「全体」が「全体」として形成される構造を示した。「父」とは、ここで、シニフィアンによつて意味されるものを確定するために呼び出されるものなのである。

「象徴的なもの」の次元での「満足」を主体に安定的に供給するための鍵となる「対象」は、そうした探求の中で、「母」に欠損し、「父」が保持しているもの、すなわち、象徴的なものの次元において両者の

動因 = 動作主	欠如	対象
想像的な父	現実的な剥奪	象徴的なファルス

「母」が「失墜」し、「対象」の探求の手がかりとなりえないことが明らかになるや、主体は「ファルス」の存在を、自らの外部に措定せざるをえない状態になる。充足関係からの「ずれ」と見なされていた欠如の様態は、そこで、端的な非存在を示す大きな穴として穿たれる。主体に十全な満足を与えずの何らかのものが、今や自らに決定的に失われていることに気づかされるのである。精神分析に

「差異」を刻む「ファルス」として同定されることになる。幼児の発達過程において、それが実際に普遍的に、男根のある／なしの差異の認識に基づくかという定かではない。ここで語られる「父」や「母」は、すでに見たように、あくまで異なる二つの「象徴的秩序」のあり方を示しているものであり、両者の差異は、かならずしも男根の有／無を起点に顕在化するわけではない。両者の差異を刻む「ファルス」の有／無は、「糸巻き」が必ずしも「糸巻き」に限られるものではない。二つの象徴的秩序の間の差異を示すものであれば、実際に男根の有／無が普遍的な契機となる必要はないのである。

ともあれ、こうして「母」に欠損し、「母」が求めていたであろうもの（＝「ファルス」）を求める段階に至った主体は、現在の自分がそれを持つていないことを認めることになる。「母」が「呼びかけ」に応えることを期待し続けていた段階の主体は、「母」との関係のうちに、なお十全な「満足」が得られることを期待していた。

「母」がしばしば不完全であるとしても、「母」に欠けているもの（＝「ファルス」）は、自分と「母」との関係のなかに見出しうるはずだと見なされていたのである。ラカンにおいて、「母」の欲望の対象＝ファルスが自分である、と形容される事態は、このような状態を示していると考えられる⁽⁷⁾。

おける「剥奪」とは、ラカンによれば、こうした主体の欠如の状態をしめすものとされる [cf. S.IV.36]。それは主体にとって端的な「不安」を引き起こすものであるが、しかし、主体は、現にそれがなく、いつの間にか、何らかの手段によって奪われてしまったことを認めざるをえない。主体は、その「原因」を「動因」としての「父」に求めながら [cf. S.IV.220]、現に奪われてしまっているものの回復の手がかりを、「象徴的なもの」としてのファルス⁽⁸⁾に求めるのである [cf. S.IV.38]。

(3) 言語構造への参入

しかし、客観的な象徴的秩序の「動因」としての「父」の措定は、単に「想像的なもの」に基づくことにおいて、なお不安定なものに留まる。「父」は、ここでは単に主体によって想像されるだけのものであり、何らかの「実在性」をもつに至っていない。主体にとって「父」が、何らかの「客観的な実在」を獲得するためには、それゆえ、「去勢」と呼ばれる出来事を契機としたエディプス・コンプレックスの最終段階への移行が不可欠となる。「去勢」によって、様々な象徴的要素は象徴的なものにおける安定性を獲得します。それらの象徴的要素の布置は、その象徴的なものの中で固定されるのです [S.IV.212] といわれるように、「去勢」によってはじめて、揺れ動く「想像的なもの」がピン留めされ、シニフィアンによって指し示されるもの（＝シニフィエ）が確定されることになるのである。

揺れ動く「想像的なもの」がピン留めされ、「象徴的なもの」とその「意味」との対応が動かざるものとして決定づけられる過程についてラカンは、「対象関係」を論じる前年のセミナーにおいて、ラシノーの戯曲『アタリー』を例に論じていた [cf. S.III.298ff.]。そこでは、さまざまな差異を刻むだけのシニフィアンの中から特権的なものが探

り当てられ、その点を軸に「象徴的なもの」が「想像的なもの」を綴じ込んでいく過程が、「クッシヨンの綴じ目」という概念を用いて語られていた。

この場面を総譜の中に主旋律を見出すように分析するならばクッシヨンの綴じ目とは、シニフィエとシニフィアンとが結びつく点、つまり二人の豊場人物の間を現実には巡っているシニフィカシオンという常に浮動する塊りと、このテキストとが結びつく点であることが解ると思います。『アタリー』という戯曲がブルヴァール風のどたばた劇に終わっていないのは、そのシニフィカシオンのお陰ではなく、まさにこの驚嘆すべきテキストのお陰なのです。

ここでのクッシヨンの綴じ目はシニフィカシオンのものを越えた様々な広がりを持つ「畏れ」という語です。このシニフィアンを中心として、マットレスの布の表面にクッシヨンの綴じ目によってできた小さな皺のように、すべてが放射線状に広がり組織化されるのです。この収斂点によってこそ、このディスクールに起きています。すべてのことを遡及的にも、予見的にも位置づけることができます。

[S.III.303]

『アタリー』の戯曲中、「神への畏れ」というシニフィアンが特権的な役割を担うことで、それまで流動的だった様々なシニフィアンと曖昧だった意味の塊がピン留めされ、「すべてのこと」を過去と未来にわたって意味づける構造が確立される。「象徴的なもの」の次元において見出される特定のシニフィアンが、「ファルス」の「痕跡 (Trace)」を印づけるものとして [cf.S.V.312] 機能することで、すべてのシニフィアンとシニフィエの間に一対一の対応が見出されるとされていたのである。

「去勢」において問題とされる事柄は、まさにこうした、「象徴的な

動因 = 動作主	欠如	対象
現実的な父	象徴的な去勢	想像的なファルス

もの」が「すべて」を覆い尽くして「客観的」な認識の体系となる論理的な展開を示している。「ファルス」の痕跡が「クッシヨンの綴じ目」として機能することで、前段において端的な喪失として見出されていた「剥奪」の場所に、象徴化された「欠如」が補填される。主体に恒常的な「満足」を与えるものは、なおそこで失われたままであるものの、その欠如自体が「象徴的なもの」のうちに組み込まれるのである。「すべて」が象徴的秩序のうちに書き込まれているならば、主体にとって失われたものもまた、「象徴的なもの」の次元での探求の中で、やがては見出されるはずであろう。現実的な充足関係からの「ずれ」として現れた「欠如」は、こうして「象徴的なもの」の中に書き込まれることになるのである。

ラカンにおいて、去勢が「象徴的負債」[S.IV.37] として書き込まれるのは、まさにこの意味においてであるといえる。「去勢」とは、自らに欠如したファルスを獲得するための道程を、「負債」として「象徴的なもの」の次元に書き込むことにはかならない。主体は、「最も現実的なもの」としての「人間存在そのもの」として、認識の外側に位置づけられるに至った「父」[cf.S.IV.220] へと「同一化」し、その「自我理想」を到達点として、現在の「自己」を位置づける。主体は、「象徴的なもの」の次元における「満足」を十全に獲得するために、自ら言語を用いて「語る主体」となり、ファルスを備えてその象徴的秩序の動因となっている「父」へ至る道筋の中に、自らを書き込むのである。

「象徴的なもの」の次元に位置づけられた「欠如」に動機づけられた「対象」の探求は、しかし、「象徴的なもの」の次元に「負債」として積み上げられたものをひとつずつ返済する過程において、決して

動因 = 動作主	欠如	対象
現実的な父	象徴的な去勢	想像的なファルス
象徴的な母	想像的な違約	現実的な乳房
想像的な父	現実的な剥奪	象徴的なファルス

* 主体の欲動の「対象」とは何か。ラカンにおける「対象関係論」が示したのは、「象徴的なもの」「想像的なもの」「現実的なもの」が絡み合いながら、「欠如の充足を求めて」「対象」が変化していく構造であった。「対象」とは、その意味において、無限の「換喩」をもたらし、様々なものがそこに代入されるような、ひとつの代数「a」として表記されるものとなる[cf. S.V.13]。後期のラカンにおいて特権的な地位を与えられる「対象a」は、「象徴的なもの」「想像的なもの」「現実的なもの」による「ボロメオの環」の中心に位置づけられた。中期ラカンにおける「対象」の概念は、それらの領域の結び合わされ方を理解するための重要な契機となっているのである。

求めるものに出会うことはない。「現実原則とはまさに、ゲームが続くということ、快 (Désir) が常に入れ替わってしまうこと、戦いの担い手が不在のままに、なお戦いが終わらないことを含意しています。現実原則は、終結へ至ろうとする我々の快をマネージメントすることを意味しているのです」[S.H.10]とされるように、「象徴的なもの」の秩序に適応した行為に「満足≡快」を求める構造へと参入した主体は、現実原則に照らした「対象」の探求のなかに、快が無限に引き延ばされる事態しか見出せないことになる。エディプス・コンプレックスの最終段階にまで至った主体は、こうして、「想像的なもの」の領域にしか位置づかないファルスを求めて[cf. S.V.12]やがて辿り着くはずの「自我理想」に向けて、無限の階梯を上る作業に導かれることになるのである。

それはすなわち、エディプス・コンプレックスにおける三つの領域の絡み合いであり、言語的な一般性を媒介にした客観的な認識が成立するに至る論理的な段階を示すものにほかならない。カントにおいてはひと足飛びに「超越論的」に要請される認識の構造の発生を、ラカンは対象関係の論理として捉え直した。快の充足という目標へと向けた対象の転回というフロイトのモチーフを、言語構造に基づく主体の認識の構造の発生の論理として捉え直すことで、ラカンは、哲学的認識論の成立の暗がりを明るみに出したのである。

ラカンのセミナーについては、原則的にジャック・アララン・ミレール編集のSém.版に従いローマ数字で巻号を示したが、刊行されていない年度のものについては、国際ラカン協会が会員向けに発行している「全集」(T.S.I.1996)を用い、日付で該当箇所を示した。

その他、本論で用いた文献の略号は次の通り。

[Freud:GW-X] Sigmund Freud, *Gesammelte Werke, X., herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, W. Hofer, O. Ischauer, Imago-Publishing Co.Ltd.*, London, 1946

[Melanie Klein] Melanie Klein, *The psycho-analysis of children, the writings of Melanie Klein vol.2*, Free Press, 1984

[Hara] Kazuyuki Hara, "Postulat du désir: moment existentiel de la subjectivité lacanienne", *Collection UTCP vol.9*, 2011

013 「荒谷大輔『経済』の哲学：ナルシスの危機を越えて」せりか書房、2

「原」原和之「ラカン：哲学空間のエクソダス」講談社、2002

註

「アスン」ポール・ロラン・アスン著、西尾彰泰訳『ラカン』白水社、2013

(1) 「彼ら〔最近の分析家たち〕は、とくに考えもせず、いわゆる対象関係 (relation d'objet)こそが分析理論において最も重要な点だと考えています。・・・主体と対象の関係を真つ直ぐにならすことが、分析を進展させるといわれるのです。その主体と対象との関係は、双数関係 (relation duelle)と見なされますが、それが分析的な状況について語るものとしても、極めて単純なものになってしまっています。双数関係としての対象関係は、まさに我々のシエーマの *par* にあるものなわけですから、考えなしに語られる対象関係から出発して分析経験で観察される諸現象の全体を満足していく仕方では構築することなどできませんでしょうか。」[S.IV.12.]

(2) 引用の文脈は、「対象関係」を論じる分析を批判し、言語に基づいた精神分析を本来のものと見なしているが、既述のように、この次の年のセミナーでは、ラカン自身が「対象関係」を主題にして、「前言語的な領野」の事柄について立ち入った検討を行っている。

(3) ラカンの対象関係論についての主題的な研究は、これまでのところ、それほど多くは蓄積されていない。「原」は、セミナー5巻の論理を詳説する中で4巻にも触れているが、その扱いは5巻の論理を補足する用途に限られている。とりわけ4巻の対象関係論と後期の対象 a の概念の関係については、ラカン自身が「私は「ウィニコットの対象関係論由来の」移行対象をもとに対象 a を作り上げたのです」[S.IV.]と述べているにもかかわらず、「彼〔ラカン〕が対象 a を発明したのは、1966年11月16日の『ファンタズムの論理』のセミナーにおいてである」[アスン, 98.]という認識が一般化されているのがラカン解釈の現状といえよう。ラカンにおける対象関係論は、その重要性に比して、主観的な研究がなされていないように思われる。

(4) 中でも、「姿としても不在としても」[S.IX.6.]捉えられない「現実的なもの」の回復としての「反復」の概念は、ラカンの精神分析の議論の特徴として、通

常の認識論的な議論とのあいだに際立った差異を示している。「失われた何か」を求めて展開される「対象」の換喩的な変転の運動は、セミナー4巻の時点において、後期の「現実的なもの」の特徴とされる「キルケゴールの反復」として理解されている [cf.S.IV. 15.]。

(5) こうした記述は、一見するところ、幼児の発達の過程をひとつの「物語」として語り出すものであるように思われるかもしれない。これらは、自ら語ることのない幼児の発達の道行きを分析家の視点から再構成したにすぎないものようにも見える。だが、ここでラカンが示しているのは、幼児が実際に発達の過程で辿る時間的な構造の「歴史」ではなく、その論理的な構造と考える必要がある。ここで問われているのは、「想像的なもの」の領域における表象を動機づけるものは何か、という問題であり、ラカンはその発生を、充足関係からの「ずれ」によって説明しているのである。ヒュームにおいて無条件的に発動するものと見なされる「想像力」は、しかし、実際には何を指して、切れ切れのイメージをつなぎ合わせるのか。ラカンはそこに「対象」を求める欲動の働きを、いわば「超越論的に」措定しているのである。ラカンは、例えば、初期の医学博士論文においては、非常に慎重に「精神分析的な記述」の妥当性について論じているが、そこでラカンが採る方法が「超越論的」なものであることについては、[Hara]を参照。

(6) [cf. 荒谷 130ff.]

(7) 母の欲望の対象が自分であると捉えることは、しばしば、幼児の「全能性」との関係で理解される [cf. 原 120.]。母親が自分の「呼びかけ」に応えることを、自分が母親にとつての欲望の対象となつていふことと理解するのである。だが、この理解は、「呼びかけ」をなお経験的な事態として解釈することに依拠している点で困難を抱えるだけでなく、ラカンのテクスト上においてもはつきりとした矛盾を引き起こす。「子供が自分について全能という概念をもつていふと考えるのは間違いです。そんなことはまったく考えられません。子供がそんな概念をもつていふことを示すものなど何もないばかりか、この発達やそれを彩る出来事が示していることは、いわゆる子供の全能とか、それが遭遇する挫折など

は全く問題にならない、ということなのです。ここで重要なのは母の全能性に対する失望、幻滅です。」[SIV,69]。

(8) この時期までのラカンは、ファルスをはっきりと「ひとつのシニフィアン」[S.V,373]としているが、62年のセミナー以降「ファルス関数」[S.IX,6204]とどう語を用い、晩年はファルスをひとつのシニフィアンと捉えることを厳しく批判するようになる「[S.IX]」。しかしながら、初期におけるシニフィアンとしてのファルスという用法も、ファルスをシニフィアンと同一視するものではない。「象徴的ファルス」は、ファルスを獲得するための手がかりとされながら、ただちに「痕跡」[S.V,38]としてしか現れないものとなる。初期におけるシニフィアン⇔ファルスの用法は、晩年の用法と矛盾するものではなく、理論上の一貫性は保たれているといえるのである。